

たら何か、そのちようづを持つて来るやろかと思ひます、それを見て覺えて來たら、如何だす」「ウム、こりや好い考へぢや、それでは早速大阪へ行きませう」といふので駕籠を二挺誂へて、喜助を連れて大阪へお越しになつて、道頓堀の立派な宿屋へお泊りになつた。その晩は宵から休み、明くる朝は早うお目覺めになる「オイ喜助、それぢや私一ツ椽側へ出て、ちようづを廻はせ云ふて来るから、汝は付いて來て、何う云ふものを持つて來るか、能く見て覺えて置けよ」「ハイ承知しました」これから椽側へ出ました「コレ／＼女中さん」「ハイ、お呼び遊ばせ」「今日がさめました」「アツ左様で、お早うござりまする」「イヤ、お早う……濟みませんがちようづを廻はしとくれんか」「アノ此處へでござりまするか」「さうや」「畏まりました」「オイ喜助、流石大阪やな、女中が畏まつて行きよつた、何を持つて來るやろか」と楽しんで待つて居りますと、眞鍮の金盥へ熱いお湯を一杯入れて、片方のお盆の上には、お皿に鹽と齒磨粉、それに房楊子が一本付いて居る「あの、これへ置いて行きまする」「ハイ御苦勞さん……オイ喜助、女中が行たから出て來い、これやぞ、喜助ツ、長い頭とはえらい違ひやないか、けどもこれを何うするのぢやらうか」「へエー、旦那さま、流石は何んですな、大阪だけあります、贅澤なものだす、毎朝こいつを飲んで置くと身體に宜いとか、何んとか云ふのですナ、フカ／＼と煙が上つて居る、それへこちらの鹽を入れて味を付けるんだすなア」さうか、成程、汝は矢つ張り板場を勤めて居るだけあつて、能う解るな、私し一人ぢや、さうは解らん

これは皆入れても宜からう、此方の皿に入れてある赤い粉、これはどうするのやろ、何んぢや知らんが、好い香ひがする」「そりや、兎も角、薬味だすから、皆入れても宜しうござりませう」「さうかさうしてこの棒は何んや」「それで今入れたやつを、かき廻はすんでござりませう」「成程、さうかイヤこりや却々好きさうになつた……ウン喜助、好い色になつたの……ぢや私し先へ之をやつて、幾らか残して置いてやるから、後は汝が食べると好い」「どうも御馳走さんで、後で御相伴いたしまする、先づ澤山召上りませ」「それぢや何う云ふものか……イヤ之も長生をした徳やで……」金盥の兩邊を持つてガブ／＼と飲み始めたが「なア、喜助、鹽加減は極く好いな、けども、美味いのか、不味いのか、田舎者の口にはチョツト解らんぞ、半分よりチョツト餘計残つたが、汝に皆やるから、皆飲んで仕舞へ」「どうも御馳走さんで……それでは頂戴いたしまする、旦那さまのお供をして、大阪へ行って、ちようづを飲んで來たといふて、村の若い奴等に自慢をしてやります」と喜助が残りの半分をガブ／＼飲んでスツカリ空けて仕舞ふた、腹の中はお湯で一杯詰つて、モウ二人共うつむく事が出來ません、上向いた限りで、ハツハツ云ふて居ると、それへやつて來ました女中が「お客さまお早うございまする」「へツ、ハツア、ツ、あの、じよツ、女中さんナ、なんぢやな」「其方のお客様、手水を持つて參りました」「女中さん、ちよツ……ちようづは、モツ、モウ一人前で澤山ぢや」「左様々々後の一人前はお晝から頂戴いたしませう」。